

【遺族】 水木 紗穂 氏（平成 15 年（当時 9 歳）、姉を交通事故で失う）

【要旨】

○当時の状況

平成 15（2003）年 9 月 1 日、姉は自転車で中学校へ向う最中、家から 500m ほど離れた交差点でトラックにひかれ亡くなりました。信号も横断歩道もない場所でした。

私は当時 9 歳で、授業中に突然先生に呼び出され、何も言われぬまま親戚に連れて行かれた病院で、母が廊下で泣き崩れているのを見ました。母に一言「お姉ちゃんが死んじゃったよ」と言われた後、そのまま母と一緒に姉の遺体を見ました。誰も何も説明してくれなかったの、なぜ姉が目の前で冷たくなっているのかさっぱりわからないままでした。

姉が亡くなった原因が交通事故だということは、姉が亡くなってから 3 日くらい後に初めて聞いたと思います。私が葬儀の後もずっと呆然としていたので、周りの大人も何と声をかければいいのか対応に困って何も言えなかったのかなと今となっては思います。

○事故後の家族の状況

姉の事故以降、生活は大きく変わりました。両親は、「姉の飛び出しであり、姉に落ち度がある」という相手の主張を覆すべく、裁判で争う準備に励んでいました。テレビや新聞の取材もたくさん受け、家中に交通事故の捜査に関係する本などが置かれ、毎日パソコンに向かって裁判で闘うための資料を作っていました。

当然、精神的にも負担は大きいようで、両親が体調を崩す場面もありました。周りからは「お父さん、お母さんがこんなに頑張っているんだから紗穂も頑張って、家族支えてあげな」と言われ、それが本当につらかった記憶があります。姉の事件に関して、家族全員で乗り越えなければならない苦難だと、姉の死の真相や名誉に関わるのだと理屈では分かっていましたが、「私もそんなに頑張らないといけないの？」「支えるって、何をどうすればいいの」という気持ちでいっぱいでした。

母が明らかに無理をしているのも分かっていたので、私から「つらいなら無理しなくていいんだよ」と言ったこともありましたが、「今やらないと、私たち以外に誰ができるのさ」と母から言われ、それはそうだよと話が終わってしまう場面も多くありました。正直、裁判の活動などに力を燃やす機会がなかったら、両親はもう亡くなっていたかもしれないということもあります。使命感や怒りにかろうじて命をつながれているのではないかと、隣で見ていて感じていました。だから止めさせられないし、ただ、それを支えろと言われても、自分から苦しみにいく人をどうやって支えればいいのか分からないというのが本音でした。

○事故後の自身の心情

裁判では、小学生だった私も法廷に立って意見陳述をしました。姉が死んでどんな思いだったのか、裁判官や被疑者、傍聴人、両親の前で述べさせられました。そうすることが家族

ぐるみの闘いで両親の願いを果たす一助になると分かっていましたが、これが本当に、本当に、嫌でした。私の悲しみは私だけのものだし、私の気持ちを裁判で勝つための武器として利用されているような感覚がして、本当に嫌でした。ただ、両親は全身全霊をかけて裁判に臨んでいたもので、そんなことは口が裂けても言えませんでした。ただ、もう亡くなってしまった姉のために、今いる私の感情がないがしろにされているんじゃないか、この苦難を乗り越えるために家族みんなで痛みを抱えていこうという雰囲気の中いように使われているんじゃないかという気持ちで、長い間、根に持っていました。

どちらかと言えば、私は姉の死から距離を置きたい、姉の死から離れた場所にいたいという気持ちだったのですが、そういった私の態度が周りの人から見れば、「事故で亡くなった姉を忘れる薄情な妹」というふうに見られてしまうのではないかという気持ちもありました。姉を想うことと「つらいことから距離を置きたい」という気持ちが同時に存在するのは、そんなにダメなんだろうかと悩んだこともありました。

このようなことを相談できる相手は、大学生になるまでいませんでしたし、自分から気持ちを話すこともハードルが高いことでした。スクールカウンセラーのような存在が学校にいたのかはわかりません。先生からも「何かあったら声かけてね」と言われたくらいで、どちらかと言えば事故前とあまり変わらずいつもどおりに接しようとしているのを感じていました。当時、私の話を誰かが聞いてくれたら何か違ったのかなと思うこともないわけではないのですが、私にとっては、姉の事故のことを知らない、両親のことを知らない、普通に接してくれる場所がほしかったので、学校で何も触れられずに過ごせたことはよかったと思います。ただ、テレビで両親が受けた取材が放送されたりすると、翌日、友達が気まずそうな雰囲気を出したり、「テレビ見たよ」「大変だね」などと言ってくるのが、私の安心できる場所を侵害されたような気持ちになって、両親の活動を理解はしているのですが、嫌な気持ちにもなっていました。

〇一番の助けとなったのは「時間」と「実家との距離」

大学から一人暮らしを始め、物理的に実家から距離を取れるようになってからは、両親の活動に触れることもなくなり、北海道から東京に行ったので周りの人も事故のことを知らず、正直、一番気楽でした。そういった時間を過ごしたことで、高校までは何となくギクシャクしていた両親の態度が少し改善されたように思います。

「助けになったこと、何ですか？」「助けてくれる人、いましたか？」などと聞かれることはありますが、私を一番助けてくれたのは、「時間」と「実家との距離」だと思います。

事故から 20 年くらい経ち、姉を亡くした時の母と近い年齢になった今、当時両親がどれだけ苦しかったのか、私とどう向き合おうとしていたのか、父母の努力みたいなものがよく見えてきた面もあります。少し俯瞰して見る視点を持てるようになったことが、今の私の助けになっているような気がします。

○あればいいと思う支援

このような私の気持ちを聞いてくれる場が世の中にあること自体、事故からずっと時間が経ってから知りました。私と同じように家族を亡くしたきょうだいを支援する「栞の会」という団体があり、代表の赤田さんから大学生の頃に声をかけていただきました。その時初めて同じような境遇の人たちで集まり、今まで誰にも言えなかった憤りとかを共有でき嬉しかったことを覚えています。両親も、裁判を通じて知り合った他の遺族や支援団体、そこでの活動などが、張り詰めた気持ちをほどくことのできる数少ない場だったのではないかと今となっては思います。

私は、幼かった当時、例えば、意見陳述を求められたときなどに、私と両親との間に立って、私の気持ちを汲んで両親に伝えてくれるような団体や手助けをしてくれる存在があれば、もっと違ったのかなと思います。